

# 大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第14号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《 広報宣伝部 》

発行日：2022年3月 第14号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記 →

QRコードをご覧ください。



大地協ニュースへのご感想・記事テーマリクエストなど

上記担当窓口まで皆様のお声を頂けましたら幸いです。

## 第26回 全国地域福祉施設研修会

～ 地域福祉施設は共生をどう実践するか ～ を振り返る

研修会実行委員長 大川 明宏

まず登壇して下さった方々並びに参加して下さったみなさま、そして実行委員のメンバーにお礼を申し上げます。そして配信のトラブル、音声や映像の不具合についての謝罪をしたいと思います。まさに予測できない事態。リハーサルでは上手くいったことがなぜか上手くいかない。2月の末なのに汗だくで機材確認する重江監督、マイクで状況説明を続けてくれた西野事務局長、話が中断しても笑いつないでくれた倉光会長、スタッフ用のノートパソコンから挨拶して下さった臣永西成区長、基調講演の西野博之さんも興が乗ったところで中断につく中断などご迷惑をおかけしました。参加者のみなさまもPC画面やスマホの前で粘り強く待っていただき、やっと安定してきたのは開始後一時間すぎているように思います。なんとか最後まで開催できたのは、スタッフと参加者のみなさまのご理解、ご協力のおかげです。本当にありがとうございました。とはいえ自画自賛、手前みそではありますが、研修会の中身は胸をはってよかったと言えるものになっていたと思っています。

コロナ感染症の動向を気かけながら、10月始動の研修会実行委員会の立ち上げは準備期間としては異例の短さとなりました。どうせならば、やってみようかということを試してみよう！ということで、今回はトップダウンでなく、日常の業務の合間を縫いながら実行委員は並列化して同時進行で目標を達成である「研修会の成功」を目指していこうと思いました。それぞれが、役割を担ってつながって成功に結び付くということを大事にしようと思いました。コロナウイルス感染症の関連で集まることは難しいことが予測されたので作業は分担制としメールやリモート会議などをつかってやりとりすることとしました。

思い通りにいかないのは世の常、チーム内は作業量の偏りなどもあり、並列化とはなっていかなかったようですし、チームメンバーがどこを切っても同じ顔の金太郎飴化してしまいました。そんな中でも実行委員のみなさんは、年末年始の業務多忙なか、作業分担し資料集づくりをしてくださいました。スケジュールが厳しくて申し訳ないという思いもありましたが、さすがは大地協のメンバーたちです。資料作成は単なる作業ではなく、学びにつながるものとなったという言葉も聞くことができたので、少しほっとしています。とはいえ、ちょっと詰めこみ過ぎたかもと反省もしています。短期間集中ということなのでなんとかできたのかもしれませんが、それぞれ実行委員のメンバーの水面下の努力のおかげかもしれません。研修会を企画し始めた10月頃の状況と異なり、年が明けると巷の予想通りのコロナウイルス感染症の拡大期となり、対面開催は中止せざるを得ませんでした。ですがオンライン開催は、遠方から交通費なしで参加できるというメリットもありました。デメリットはまさに直面した技術的なトラブルに弱いという面はありますが、予想よりも多くの方に参加してただけということでもって、成功であったと思っています。

地域福祉という、人々が生活する街をフィールドとして、身近なところに種をまき続けるということは、はるかな遠くの高みを目指すムーンショットというよりも、向こう三軒両隣からはじめるということではないかと思っています。ルーフショットを継ぎ足し高みと未来を目指す。屋根の上から次の屋根へと先達たちから私たちに引き継がれてきたように、次代へと引き継ぐというつながりつなぐということなのではないかと思いました。その中で取り組むべき課題は変化していくわけですから、施設の在り方も変わっていくのだと思います。

地域福祉施設が共生にあゆむためにどう実践していくか？という問いにみなさんならどう答えるか聞いてみたいですし、私は、基調講演でも西野博之さんが語っておられましたが、安心できる関係性は、対等性とも関連していて、とても共生にあゆむために重要であると思っています。私の所属する施設「キダーハイム」をつくった三木達子先生も子どもたちとご家族が安心して過ごせる居場所をつくるということを考えておられました。安心して何かができる場を提供することは施設の機能でもあり、施設職員自身の意識によるものであり、施設職員に対する周囲の意識でもあり、地域からの共通理解でもあるかと思っています。自分自身は安心できているかな？同僚は安心できているかな？子どもたちや、ご家族が安心できる場をつくられているかな？とそのようなことを考えながら、私自身も今回の研修会をきっかけにさらにあゆみをすすめていきたいと思っています。



社会福祉法人 雲柱社  
フレンドリープラザ墨田児童会館  
八重田 裕一朗

# 現場実践と 学びの両輪で 地域福祉を考える

研修に参加させていただき、多くの発見と学び、刺激を頂きました。

基調講演で西野博之さんから「命を真真中に置いた支援」という話がありました。我々福祉現場の職員は支援者であると言われていますが、そもそも「支援」とはどういうことなのかを考えさせられました。そして「支援臭」という言葉を聞いてハッとさせられたのは私だけでしょうか。支援者が、良かれと思って行った行動や言葉かけが、利用者にとってどうだったのか。一度立ち止まり考える機会を与えていただきました。そして、支援する側が「幸せ」「楽しい」と思わないと課題を解決できない話がありました。利用者向き合い頭を悩ませていることも多い日々。しかし、自分自身で仕事のやりがいを見つけ、課題を解決する力をつけるためにも、前回の全国研修会で阿部志郎先生のメッセージでもあったように、下を向くではなく上を向く。そこには「夢」があり、そこには「ビジョン」が描かれると改めて思いました。

パネルディスカッション、東京からは、仲間の存在・助けてに向き合う・つながり、人格の尊重・地域に自ら足を運ぶ等のキーワードに事例を用いて児童分野の発題させていただきました。児童館・学童クラブにおける居場所、それは「何もなくてもいい、何かしたければすればいい」と言った枠にとらわれない「自由な場」が子どもたちに今求められていると強く現場から感じたからです。多くの他者との出会い・そしてつながり、そこから体験・経験（たくさん失敗も）を通した、生きる力を育むことを、子どもたちと共に行っていきたいと思いました。

保育・児童・障がい・高齢者の分野からの発題があり、共通の入り口は「利用者のありのままを受け入れる所から支援が始まる」ということを再確認しました。それぞれの分野の方とディスカッションする中で、各分野の垣根を超えた、「地域丸ごと切れ目のない支援をどう構築していくか」これがこれからの地域福祉の課題であるようにも感じました。それぞれの分野では多くの取り組みをしています。それを更に各団体が「地域福祉」というテーマのもと理解と共感を持って、様々な課題にも協働で取り組んでいきたいと思いました。

最後に阿部志郎先生から、今回も頂いた「おそれるな、種をまけ、たとえ鳥が飛ばんでも」の心強いメッセージ。様々な課題や困難なケースがあろうとも、多くの関係機関との連携・協働により解決できない課題はないと信じ、日々の働きに感謝して前を向いて進んでゆきたいと思いました。



社会福祉法人 石井記念愛染園  
愛染橋保育園 朴 喜美子

# ひさしぶりの大地協

「セツルメント運動のはじまりは象牙の塔から出ることのなかった者たちの罪の意識から始まった、その最初の思いをどう受け継ぐのか？」

阿部志郎先生からのメッセージがありました。私自身の今回のテーマは「当事者意識」でした。いたたまれなくて突き動かされたその罪悪感は当事者意識と置き換えることができるのではないかと考えながらお話を伺っていました。

自分自身、在日コリアの当事者としての経験は対人援助者として自分の強みだと思っています。当事者として経験してきた辛さや悔しさを同じような境遇に置かれている方の感じている辛さや悔しさを共感できるそんな気持ちで仕事に向き合ってきました。

「ボランティア」とは相反する言葉のようですが、あえて、「仕事」という言葉を使ったのは、私の中で仕事とは対価をいただいているからこそ、使命を持って誠実に向きあっている覚悟の表れだからです。

当事者の気持ちに寄り添うことはできても、当事者にしかわからない辛さやしんどさがあることを、また自分が知り得ない苦しみを抱えている方がいらっしゃることを肝に銘じながらも、相手の置かれている状況を知ろうという気持ち、しんどさに共感する姿勢で今後も向き合っていきたいと考えています。

文字数がもったいないので、西野君へのクレームは割愛しますが、今回、全国研修に関わらせていただき、当日や準備を含めたくさんの方と話をしました。

その中で、コロナで内向きになっていた自分の視野に気づかされたり、介護・障がいの分野の方と話すことで、いつも自分が話すこと的主語・主体は健常の子ども中心であることに気づかされ、そこでも自身の考え方や見え方の偏りに気づき、改めて大地協の良さを感じることができました。

今後も大地協に参加させていただくうえで、ワークライフバランスの名のもとに育児中の女性は参加できなくて仕方がないというような、ごまめ扱いするのではなく、育児しながらも参加しやすい時間帯の模索や仕事の分担を一緒に考えていけたらいいなと思っています。

# 安心して自己発揮できる居場所を



社会福祉法人名古屋キリスト教社会館  
活動センターねーぶる 元田 和宏

先日は第26回全国地域福祉施設研修会にパネリストとして参加させていただき、大変勉強になりました。西野博之さんの基調講演は本当に心に響きました。同じ福祉の仕事をするものとしてもですが、一人の父親という立場からも、自分の子育てを振り返る契機となりました。私はパネルディスカッションの中で最後に「相手のことを理解しようとする姿勢が大切」ということをお話ししましたが、実はこれがまだまだ自分でできていないこと、特に近い人に対してこそ、それを実践することが難しいということを感じています。心に余裕を持たず、我が子を傷つけてしまっているなど思うこともしばしばあります。「そのままでもいいんだよ」と言ってあげることは、なんと難しいことかと感じてきました。

先日、HSPという言葉を知りました。HSPとは、Highly Sensitive Person（ハイリー・センシティブ・パーソン）の略で、人一倍繊細な気質をもって生まれた人という意味です。病気や障害ではありませんが、人の気質を表す言葉です。人の気持ちによく気付く反面、人の感情に自分の気持ちも左右されてしまったりします。自分がHSPにあてはまるのかわかりませんが、「そうかもしれない」と思った時、ふと気持ちが楽になったのです。自分にも、障がいを持ったメンバーたちと同じように「特性」があるのだと思いました。そんな自分を認めて、弱さを補うような工夫をしていきながら生きていけばよいのではないかと思えました。そこではじめて「多様性を受け入れる」ということが胸にスツと落ちたような気がしました。

子育ても、自分だけでなんとかしようと思わず、いろいろな人に頼りながら、安心して自己発揮できる「居場所」を我が子にもつくれたら良いと、心から思いました。パネルディスカッションで様々な分野の方たちと同じテーマでお話してきたことも貴重な経験となりました。できることならば、パネリストの皆さんと直接お会いして、雑談なども含めたくさんお話しがしたかったです。今回は名古屋からオンラインでの参加となりましたが、機会がありましたら次はぜひお会いできたらと思います。こうしたコロナ禍の中でも、全国の、様々な分野の方と出会い、お話しを聞くことができることは、「自分もがんばろう」という明日への力となりました。ありがとうございました。

# 地域との関りを深める取組み



社会福祉法人 都島友の会  
特別養護老人ホーム ひまわりの郷 野間 広二

全国研修会を迎え、パネリストとして高齢者施設での地域福祉の取組みを発表させていただきました。他のパネリストの方々も保育、障がい、児童館と様々な分野の視点から地域福祉へのアプローチを発表されており、自分自身とても勉強させていただきました。また、基調講演の西野博之さんの「誰ひとり取り残さない居場所づくり」の講演は、多摩川（たまりばー）のほとりにあるアパートに学校に居場所がない子供たちが集まり、音楽を聞いたり、料理を一緒に作ったり、笑ったり、泣いたり、怒ったりしながら自分たちの居場所にいつの間にかになっている。まさに共生にあゆむではないかと感じました。

地域で起こっている多種多様な問題をどのように解決していくのか、高齢施設としてどのように関わりを持ち、共生していくのか、1つ1つの課題に縦割りで考えるのではなく、横の繋がりを広めて共有し実際に行動していくことが、地域福祉であり、共生にあゆむことになるのではないかと考えています。

その為には、まずは自身が街中を歩いて生の声を聞くのも大事と考えます。待つのではなく、積極的に地域との関りを持ち、様々な話しを直接聞いて、施設に持ち帰り情報を共有し何が必要なのかを課題として、目標に向かって取り組んで行くことが重要と思いました。

第26回全国地域福祉施設研修会特集は下記QRまたは「大地協」で検索ください。

第26回全国地域福祉施設研修会



ページへ Jump !

みんなのびわこセツルの家  
全国児童部会 NATIONAL WORKSHOP  
中学生 高校生 活動  
Activities of junior high school and high school students



大地協ポスター発表ページへ Jump !

# 全国地域福祉施設研修会開催のお礼

今年第26回となるこの研修会は、私にとって心のふるさとのようであり、また全国のセツルメントを源流とする地域福祉を志す仲間から励ましを受ける場でもあります。倉光会長のいつもと変わらないユーモアあふれる挨拶、パネルディスカッションで朴さんが冒頭で触れられた小掠昭先生のお名前、またパソコン画面上での参加者の皆様のお名前を見ながら、この会の歩みを思い起していました。

阿部志郎先生が、隣保事業の歴史を語られました。大正、昭和期の初めには「隣保事業にあらずば社会事業にあらず」と言われたほど社会事業の主流でした。戦時中、弾圧を受け隣保館は減少し、戦後は、全国社会福祉協議会の組織からは見放され、隣保事業が社会福祉事業法に記載されても届け出制という扱い、これによって多くの隣保事業施設が脱落しました。しかし、それに耐え、生き残ったセツルメント施設が現在の日本地域福祉施設協議会を結成し、今日に至っています。

今年の会が開催できたのも大阪市地域福祉施設協議会の方々の方力によるものです。前回、今回とオンラインという不規則な大会にもかかわらず、企画を立て、講師を依頼し、実行していただきました。準備を担って下さった実行委員長の大川明宏さんを始め実行委員の皆さま、また基調講演のために大阪まで出向いてくださいました西野博之さん、またパネラーと司会者の皆さま、日本地域福祉施設協議会事務局長として、会の活動を支えて下さっています西野伸一さんに心からお礼申し上げます。

主題講演、パネルディスカッションを聞き、サムエル・バーネットのことを思い浮かべていました。ご承知の方が多くと思いますが、バーネットは1873年、東ロンドンスラム街にあるホワイトチャペル地区の教会の牧師になりました。

牧師ではありますが、地域の問題解決に直ちに取り組みます。小学校を再開する、昼間働いている少女たちの夜間学校を開く、勤労者の教養のための成人学級を開く、母親クラブを組織する、救貧委員会員となる、芸術・文化活動を展開する、児童の夏休みを利用した小旅行、空き地を取得して遊び場を造り子供にはスポーツを提供し、大人にはダンスパーティや花の展示会などを開き生活環境の改善に乗り出した。この活動が基盤となってセツルメントが起りました。

セツルメントで働いたベヴァリッジが福祉国家構想を立案し、ボランティアとしてセツルメントに協力したアトリー首相によって福祉国家が実現しました。

西野博之さんの活動は、ソーシャルアクションとしての働きであると理解しました。不登校の子どもたちへの活動をとおして、大人たちの見方を変え、社会を変革していくダイナミックな動きを学びました。パネラーの方々の取り組みの紹介もニードを見つけ積極的に取り込んでいることが分かりました。いまや様々な生活課題が噴出し、対応する側も今までの地域福祉の概念を超えて対応することが求められていると思いますし、今日の講演とパネルディスカッションの発題からそう思いました。

この研修会は、仲間の発表を聞き、自分の施設で実行出来ることを学ぶ場でもあります。多くの活動のためのヒントが与えられました。たとえ、制度の枠を超えることであっても、それに向かって進んで行きましょう。ロバート・ブラウニング「鳥がつい間歩からと言って、種を蒔くことを恐れるな」

日本地域福祉施設協議会 会長  
横須賀基督教社会館理事長 岸川 洋治